ニューヨーク、ブルックリンの教会。
赤茶の煉瓦を基調にした外壁に、美しい諧調を帯びた薔薇窓が切られた外観は、高飛車に神の威光をしろしめすよりも地域に根差した布教精神を重んじる。
今日も迷える子羊が扉を叩く。

「こんにちは。お時間よろしいでしょうか」
「かまいませんよ、お祈りですか」
礼拝堂に緊張した声が陰々と反響し、床にモップがけしていたピンクゴールドの髪の青年が振り返る。
「あなたは？」
「ただの居候です。なんていうのかな、雑用係が一番近いか？　ちょっとした縁あってこの教会で働かせてもらってるんです。礼拝堂の掃除や説教の準備、先生の身の周りのお世話に至るまで色々やらせてもらってます」
「はあ……お弟子さんみたいなものですか」
「そうそれ」
指を弾いて笑顔を見せ、モップを立てかけ一旦奥へ引っ込む。
「新しい人が来ましたよ、先生」
「３丁目のジョアンナさんでしょうか。足が癒えるように願をかけにこられるのですが、バスは事故をおこすのが怖いからと3ブロックを歩き抜くのはよい心がけです。本人がお気付きにならないだけで既に奇跡は起きているのかもしれません。それとも9丁目のセスさんでしょうか？　十代で妊娠・駆け落ちした娘さんの無事を祈りに来るのですが、彼女を孕ませた彼氏にショットガンを突き付けたのはまずかった。娘をキズモノにしたと大層怒っていらっしゃいましたが、それを決めるのは娘さんご自身です。お腹の子にも罪はないというのに、些か過激な行動に走りすぎましたね」
「初めての方です」
咳払い。
「失礼しました、ご用件は」
「懺悔に参りました」
傍らの青年の顔が微妙に強張る。この教会における『懺悔』の裏の意味を知っている反応だ。
「案内します、どうぞ」
「わざわざありがとうございます」
告解室の前で別れる間際、殊勝に礼を述べる女性に対し、どもりがちに気遣うそぶりを見せる。
「あの……大丈夫ですか」
「え？」
「顔色が優れないから……すいません、変なこと聞いて」

「ああ……優しいんですね」
女性が義理で微笑む。
「たぶん薬のせいです」
「どこか悪いんですか」
「精神科でもらった薬です」
それ以上の説明は省き、踵を返して会話を打ち切る。
お節介が過ぎた失言を悔やむも時既に遅し、いたたまれなくなった青年はすごすご引き返していく。
ノブに手をかければ扉が軋み、告解室の全容が視界に立ち上がる。
狭い部屋だ。
馬蹄型の天窓には美麗なステンドグラスが嵌め込まれ、聖書の一場面を神々しく描き出す。
正面にはカウンターを備えた木製の仕切りがあり、何者かの気配を向こう側に感じる。
「おかけなさい」
落ち着き払った声音に促され、ぎくしゃくと椅子に掛ける。
仕切りの下部には窓が穿たれていた。女性の位置からは神父の手しか見えない。しなやかな靭さを感じさせる手。
「本日はどんな懺悔でしょうか。ここは神と私とあなたの秘密の小部屋です、プライバシーは絶対厳守しますので心おきなくお話しなさい」

「さっきはだだ漏れでしたけど」
「あれは懺悔として聞いたのではありませんからノーカウントです」
「管理が杜撰ですね……」
本当に大丈夫かしらこの人。
決意を固めてやってきたはずが、本人の声を聞きにわかに不安になる。
が、今さら引き返せない。
この日の為に彼女は必死に働き通して金を貯め、自殺の衝動を辛うじて踏み止まってきたのだ。
女性は顎を引き、感情を封じた声音で断固宣言する。
「復讐するは我にあり」
固い声音が狭い告解室に響き渡る。
数秒の沈黙。
女性は即座に後悔する。
噂はデタラメ？　それはそうよ、こんなうまい話あるわけ

がない。

でも、少しでも可能性があるなら……。

「我、これを報いん」

ハッと顔を上げる。
それは合言葉だ。
新約聖書の中にあるローマ人への手紙、第12章第19節。

「伺いましょうか」

「私はアメリア・オースティンです。十年前に事故で両親を亡くしてから、妹と二人で生きてきました」
アメリアが堰を切ったように話し始める。
「妹の名前はアマンダ・オースティン。ひょっとしたらご存知かもしれません」
「先日の新聞で拝見しました。ご冥福をお祈りします、犯人はまだ捕まってないとか」
「うわべだけの同情はいりません。望みは復讐です」